

川上宏奨学金報告書

論文題目：「多文化共生」社会を考える—日本人ムスリマの生活と子育て

川上宏奨学金をいただき、『多文化共生』社会を考える—日本人ムスリマの生活と子育て』を執筆することができた。論文の内容と具体的な調査の内容について以下の通り報告する。

1. 卒業論文の要旨

近年、日本人でイスラームに入信する人が増えている。「戒律が厳しい」「男尊女卑」というイメージが強い異文化の宗教をなぜ自ら選択するのであろうか。また、外国から日本に移住し生活を送るムスリムも増えており、総じて日本におけるムスリム人口は増加傾向にあるといえる。

日本におけるムスリムは多様化する日本の内実を体現する存在である。とりわけ日本人ムスリムたちは従来の「日本人」の像に当てはまらないという点が特徴的だ。彼らは日本の内部さえもが多様化していることを示す日本の多文化化の事例に当てはまる。

ムスリムの生活環境は人口の増加とともに徐々に改善されている。一方で新たな問題も顕在化しており、その一つがイスラーム教徒の子育てと教育に関するものである。日本社会における宗教的マイノリティであるムスリムは、学校生活においても制約を受けることがある。それは道徳の授業、歴史の授業、給食など多岐にわたるが、現在のところ現場が個々の事例に対応するというかたちで解決が図られており、抜本的な改善策はとられていない。

本研究では、このような問題意識のもとに、日本人ムスリマで子育てをしている、もしくはその経験のある5人にインタビュー調査を行った。

インタビューの分析の前に、異なる文化的背景を持つ人々の中の共生という意味の「多文化共生」が今日どのように理解されているのか、また多文化教育の歴史をイギリスの事例からたどった。それらを踏まえて現在の日本の多文化教育にある問題点である、いわゆる「同化主義」に陥っている現状について理解する。さまざまな文化的背景に対応できるような制度が今日の日本の教育にはないことがわかった。

続くインタビュー調査の分析からは、次のようなことがわかった。今回の調査は日本人イスラーム教徒本人である彼女たちの生活の中の信仰実践の様子と、子育ておよび教育における悩みやムスリムならではの問題の2つのカテゴリーを中心におこなった。

インタビューからは主に次のことが読み取れた。まず前者について、日本人ムスリマた

ちがムスリムとして日本で生活を送るということには大きな困難が見受けられない。一方で、後者については、子育て、特に子供を公立学校に通わせている場合により顕著に、日本のやり方とイスラームの考えの間に齟齬が生じ、その対処に試行錯誤している傾向が見えてきた。

文化の多様化、そして価値観の多様化する日本社会において、異なる背景を持つ人々の中でどのように社会を形成していくことが可能であるかという問いは避けて通ることはできない命題である。本稿においてはその多様化の一面を示すとともに、多文化共生の実践の必要性を宗教という面から論じている。

2. 卒業論文を書き終えて

今回の卒業論文執筆を通して、自身の研究したいテーマや問題関心のある分野がどこにあるのかをより明確に意識することができた。論題の選定に紆余曲折したもの、最終的には大学に入学する前から興味を抱いているイスラームに関する論文をかけたことを本当にうれしく思っている。執筆の後押しをしてくださった、故川上宏先生とご家族のみなさま、インタビュー協力者の方々、森暢平先生、そして東京ジャーミーでお世話になったすべての人に感謝の意を示したい。

3. 奨学金の主な用途

前述の通り、本研究では日本人イスラーム教徒の女性 5 人にインタビュー調査を行った。協力者の方々には奨学金を利用してお礼の品を購入し、お渡しした。またインタビュー調査にさいして、IC レコーダーを新たに購入した。この費用も奨学金から捻出している。

卒業論文を執筆するにあたり、これまで所持していなかったノートパソコンの購入をした。高額のため全額を自費で負担することが困難であったが、奨学金を充てることでその負担を減らすことができた。